

がくいんふくいんか 学院福音化2023年9月 ピリピ人への手紙

ピリピ人への手紙の概論として歴史的背景をバイブルエフェクトのYouTubeで見てみましょう。

参考YouTube ピリピ人への手紙の歴史的背景 バイブルエフェクトより
https://www.youtube.com/watch?v=5Pj_vYe_ELg

<ピリピ人の手紙について>

ピリピ人への手紙はパウロがローマに一回目に投獄されて2年間、牢獄にいた間に書かれた書簡の1つです。獄中書簡と言われる「エペソ人への手紙」「ピリピ人への手紙」「コロサイ人への手紙」「ピレモンへの手紙」の中で、最後に書かれた書簡(手紙)です。ピリピ教会の設立と働きの内容は、使徒16章を参考にしてください。簡単に紹介します。(特に、使徒16:9-15を見てください)



パウロが第二次宣教旅行に行ったとき、アジア地域に行こうとしていたのですが、マケドニアに行くようにという幻を見ます。そこで、トロアスからピリピに行くことになりました。ピリピは、マケドニア地方で重要な都市で、ローマの植民地でした。このピリピでパウロ一行が福音を伝えるとき、すでに神様に仕えていたリディア(ルデヤ)という人が、パウロ一行を自分の家に招待します。それがピリピ教会になりました。その後、占いの靈につかれた女奴隸を癒やし、そのことゆえに、むち打たれて、牢獄に閉じ込められましたが、そこを守っていた看守とその家族すべてが福音を聞き、神様を信じるようになりました。そのような特別なことがあったからなのか、ピリピ教会はパウロを特別に愛していて、パウロの必要すべてを支援しました。そして10年後にパウロがローマの牢獄に投獄されたという知らせを聞いて、ピリピ教会の信徒たちは、経済的に苦しい状況だったのですが献金を集めて、エパフロディトを通して渡したのです。そのときパウロは、ピリピ教会の状況をエパフロディトの話で聞くようになりました。そこで、それをたたえ、慰め、愛の手紙を書いてエパフロディトに持たせて送ったのがピリピ人への手紙です。

このピリピ人への手紙は、4章だけの短い書簡です。10~15分で読めると思います。全体を理解するため、みなさんが必ず読んでください。

今月の学院福音化の4課の中ですべて出て来るのが「苦しみ(苦難)」です。それゆえ、今月は苦しみ(苦難)について、その内容を黙想したいと思います。

1課「苦しみを受ける信徒の確信」

ピリピ 1:9-11

09 私はこう祈っています。あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになります。

10 あなたがたが、大切なことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、

11 イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と讃美が現されますように。

神様は、はじめから福音を約束してくださいました。原始福音と言われる創世記3:15の女の子孫から始まり、箱舟、犠牲のいけにえ、過越の子羊、インマヌエルで予表された、そのみことばの実体として来られたイエス・キリストが、その福音の主人公です。そのようにして、この地にまことの光、いのちの光として来られたイエス・キリストを、だれも知らず、だれも受け入れなかつたと、ヨハネ1章に書いてあります。そのように33年間生きたイエス・キリストの人生と働きは、苦しみ(苦難)と迫害と患難の連続でした。結局、メシアを待ちに待っていたユダヤ人、すなわち、ご自分の民によって、十字架にかけられ殺されました。そして、復活されたイエス様が弟子たちに現れて語られたみことばは「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(ヨハネ 20:21)でした。

神様はイエス様をこの地に平和の王として送ってくださいました。その平和の王は、十字架にかけられて死ぬために来られたのです。そのようなイエス様が弟子たちをこの地に遣わされるということです。「父がわたしを(死になさいと)遣わされたように、わたしもあなたがたを(死になさいと)遣わします」ということです。

他のところで、弟子たちを二人ずつ現場に送られたときも、「わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします」(マタイ 10:16)と言われました。それは、「あなたがたは羊だけれど、狼の中に入って戦って勝ちなさい」ということではないでしょう。「行って食われなさい」ということでしょう。

1. 神様の始まり

パウロがエパフロディトを通して、ピリピ教会の中に紛争、分裂があること、そして、ユダヤ教の偽りの教えがあることを聞きました。しかし、パウロは神様にほんとうに感謝して、ピリピ教会の信徒たちを思い起こすたびに喜びの中で祈っていると言います。

1:3 私は、あなたがたのことを思うたびに、私の神に感謝しています。

1:4 あなたがたすべてのために祈るたびに、いつも喜びをもって祈り、

その理由が5節からです。

1:5 あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。

1:6 あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。

ここで言われている、神様が始められた「良い働き」とは何でしょうか。奉仕、救済でしょうか。ちがうでしょう。イエス・キリストを通した救いの働きのことです。それは、十字架を通して完成された働きです。ですから、ピリピ教会の信徒にいろいろな問題や事件があることは、それはむしろキリストの苦しみ(苦難)に預かることになり、神様がなさる働きに器として用いられることだと、期待と感謝がパウロにはあふれていたのです。

それゆえ、1:29-30のようなアドバイスもすることができたのです。

1:29-30

29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。

30 かつて私について見て、今まで私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。

神様の福音を伝えるための始まりは、神様の救いの働きを成し遂げるために、苦しみ(苦難)もともに預かることが始まりだということです。

2. 神様の計画

パウロが投獄されていることで、パウロのことを心配しているピリピ教会の信徒に向かって、これも神様が計画されたことで、神様の働きだと言っています。

ピリピ 1:12-14

12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音の前進に役立つことを知ってほしいのです。

13 私がキリストのゆえに投獄されていることが、親衛隊の全員と、ほかのすべての人たちに明らかになります。

14 兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことで、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆にみことばを語るようになりました。

パウロが投獄されたことで、牢屋の外でいろいろな人が、いろんななかたちで、いろいろな動機を持ってキリストを伝えているので、すべてのことを喜んでいるとパウロは告白しています。

ピリピ 1:15-18

15 人々の中には、ねたみや争いからキリストを宣べ伝える者もいますが、善意からする者もいます。

16 ある人たちは、私が福音を弁証するために立てられていることを知り、愛をもってキリストを伝えていますが、

17 ほかの人たちは党派心からキリストを宣べ伝えており、純粋な動機からではありません。鎖につながれている私をさらに苦しめるつもりなのです。

18 しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいます。そうです。これからも喜ぶでしょう。

伝道は方法ではありません。神様がなさることです。しかし、私たちには伝道するときに「私が正しい」「あなたが正しい」「なぜあなたはそのように伝えるのか」という争いをして、問題になることもあります。

たとえば、私は穏やかに話します。伝道師をしていたとき、伝道キャンプに行って、他の教会の私より年上の女の伝道師さんがいました。私に先に伝道してくださいと言われたので、お店に入って、店のご主人に福音を伝えましたが、そのご主人は受け入れませんでした。お店から出て来たときに、その女の伝道師さんが「なんで、そのように穏やかにやさしく福音を伝えるのですか。そのように伝えては福音は伝わらないですよ」と言いました。心の中で「要らないお世話だな」と思いました。

パウロは、牢屋の外に起こっているすべてのこと、結局、神様の計画で神様がなさっていることだと見たのです。結局、それはキリストが宣べ伝えられることだからと言います。神様が神様の働きをなさるのです。

3. パウロの願い

クリスチヤンの願いは、不確実な未来に対する、あいまいな願いではありません。明らかな約束の中から出て来る確信であるべきです。パウロはダマスコで復活されたイエス・キリストに出会い、そして、アナニアを通して自分が選ばれた器だということを悟ったときから、自分を通して、ただイエス・キリストだけが現れることを願っていました。それが1:20-21です。

20 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。

21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。

パウロは、非常に激しい、耐えられないほどの中迫を受け、生きる望みさえ失うほどだったと言うこともありました。死刑の宣告を受けた思いだったと言っています。(IIコリント1章)しかし、そのような苦難が忍耐を生み出し、忍耐は練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すとローマ5章に言っています。(ローマ5:3-5)

最後にパウロが自分が投獄されている状況で、2つの葛藤で祈っていると言っています。投獄が終わって死刑にされても、それはこの世から離れてキリストとともに永遠に生きることになるので、もっと良いことだと知っているけれど、しかし、この地で愛するピリビ教会の信徒と信仰の交わりをするその瞬間も、キリストの中で天国の生活を味わっていることだということです。それゆえ、2つの内でどちらを願うべきなのか、幸せな葛藤の祈りをしていました。

私たちは、この世で楽な生活や、信仰生活が少しうまいくと、世の中は良いなと思います。そして、少しだけでも問題があると、早くこの地から離れて、神の御元に行きたいと思うのではないでしょうか。パウロはまったく違いました。

それが、22-26節に書いてあります。

22 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。

23 私は、その二つのことの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。

24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためににはもっと必要です。

25 このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています。

26 そうなれば、私は再びあなたがたのもとに行けるので、私に関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。

パウロは、一回目の投獄で無罪となり解放されます。その後、3年後に2回目に投獄され、その2年後ローマ皇帝ネロによって死刑宣告を受けます。

パウロは、キリストの中の苦しみ（苦難）を感謝して、その中で神様がともにおられることをいつも味わっていた人でした。これが私たちの信仰告白になりますように。